基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	基礎科学		担当教員	大橋　敦子		
開講時期	2 年次前期		総時限数	16 時限	授業形態	講義	単位数	2 単位

■ 科目内容

はりきゅうの臨床の現場では、筋骨格系の痛みのみならず、自律神経失調などの症状や高血圧など循環系に関わる症状や、高血糖など血糖値に関わる症状、うつ症状などの精神機能に関わる症状などを有する患者を診療することがある。この際に各種症状に関わる薬の知識を有することは、患者の症状を深く理解するためにも重要である。本科目では、各種症状に関わる生理機能及び薬物の作用機序を学習する。また本科目では実験実習とそれによって得られたデータに関する解釈を通じ、科学的な思考に必要なスキルを学習することを目的とする。

■ 到達目標

・各種症状の病態に関わる生理機能を理解する。
・病態に応じた薬物の作用機序を理解する。
・実験により得られたデータから客観的・論理的に考察することができる。

■ 授業方法・教材

・教員が作成した資料を基に行う。
・参考図書「生理学実習 NAVI　第 2 版　(医歯薬出版株式会社)」　図書室にあるので読んでおくこと

■ 評価基準

・期末試験及び測定実習により提出するレポートにより評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			血圧測定実習
2			
3			血圧に関わる薬の知識と実習結果のレポート作成
4			
5			抗うつ剤、精神に関わる薬の知識
6			
7			自律神経に関わる薬の知識
8			
9			痛みの制御に関わる薬の知識
10			
11			血液凝固に関わる薬の知識
12			
13			血糖値測定実習
14			
15			血糖値の調節に関わる薬の知識と実習結果のレポート作成
16			

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	人体機能学		担当教員	工藤　匡		
開講時期	2 年次通年		総時限数	30 時限	授業形態	実技	単位数	4 単位

■ 科目内容

1 年次に履修した解剖学Ⅰ・解剖学Ⅱの内容に基づき、人体の構造・機能や運動学について学習する。

■ 到達目標

・中枢神経系，末梢神経系について説明できる。
・視覚器や聴覚器について説明できる。
・局所的な運動器の構造・機能・運動学について説明ができる。
・脳神経系に支配される運動器の構造・機能・運動学について説明ができる。

■ 授業方法・教材

・教員が配布する資料
・解剖学の教科書：「解剖学（第 2 版）（公社）東洋療法学校協会編　医歯薬出版（株）」

■ 学習方法

主に座学形式で学習する。必要に応じて学生同士で筋運動の確認や触診などを行う。

■ 評価基準

期末試験の成績で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			中枢神経系①（錐体路）
2			中枢神経系②（錐体外路）
3			末梢神経系①（脳神経）
4			末梢神経系②（脳神経）
5			末梢神経系③（脳神経）
6			末梢神経系④（脳神経）
7			末梢神経系⑤（神経叢）
8			末梢神経系⑥（神経叢）
9			末梢神経系⑦（自律神経）
10			末梢神経系⑧（自律神経）
11			感覚器系①（視覚器）
12			感覚器系②（視覚器）
13			感覚器系③（聴覚平衡覚器）
14			感覚器系④（聴覚平衡覚器）
15			頭部・顔面部の骨・筋
16			頭部・顔面部の骨・筋
17			頸部の筋
18			頸部の筋
19			胸部の筋
20			胸部の筋
21			腹部の筋
22			腹部の筋
23			背部の筋
24			背部の筋
25			上肢帯・上肢の筋
26			上肢帯・上肢の筋
27			下肢帯・下肢の筋
28			下肢帯・下肢の筋
29			重心・歩行
30			まとめ

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	病理学概論		担当教員	二本松明、細川眞澄男（昼） 田中伸哉（夜）		
開講時期	2 年次通年		総時限数	21 時限	授業形態	講義	単位数	3 単位

■ 科目内容

病理学（Pathology）とは、病気の観点から、生物学的に勉強していく科目である。 生理学は主に健常者の身体機能を基準として勉強していく。 対比して病理学は、患者の障害された身体機能を基準として、比較的に病状ごとの各論的に、医学を学習していく。

■ 到達目標

・疾患は内因と外因により生じ、いくつかの群に分類されることを理解する。

・細胞・組織の病変を示す用語の内容について代表的なものを把握する。

・疾患の発生と経過ならびに予後について、定型的なものを理解する。

・循環障害、代謝異常、炎症と免疫異常、腫瘍などによる病変を説明できる。

■ 授業方法・教材

・教員が配布する資料を用いて評価する。

■ 評価基準

・期末試験（100%）により評価する。

■ 連絡事項

・病理学は解剖学、生理学など学習で習得した正常な人の構造や働きの知識を基にしている。このため解剖学や生理学の知識を復習しておくことを勧める。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			病理学の目的と役割、病因(内因)
2			病因(外因)
3			循環障害
4			循環障害
5			循環障害
6			退行性病変(萎縮)
7			退行性病変(変性)
8			退行性病変(壊死と死)
9			進行性病変(肥大と増殖、再生)
10			進行性病変(化生、移植、創傷治癒、組織内異物処理)
11			炎症(炎症の一般)
12			炎症(炎症の分類)
13			炎症(炎症の分類)
14			腫瘍(腫瘍の一般)
15			腫瘍(良性腫瘍)
16			腫瘍(悪性腫瘍)
17			免疫異常・アレルギー
18			免疫異常・アレルギー
19			先天性異常
20			先天性異常
21			神経系疾患の成り立ち
22			まとめ

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	臨床医学総論		担当教員	二本松　明		
開講時期	2 年次通年		総時限数	45 時限	授業形態	講義	単位数	6 単位

■ 科目内容

はり・きゅうなどの東洋療法を実践するためには、西洋医学を基盤とする臨床医学についての全般的知識も必要である。臨床医学総論では、患者さんに対する医療面接技法や全身的及び局所的ならびに系統的な診察法を習得すると共に、臨床検査法や基本的な症候についても十分に理解し、疾患の診断や治療法を学ぶ上での基礎的な知識を学習する。

■ 到達目標

・医療面接における注意点や医療面接において確認すべき事項を説明できる。
・診察法の種類、身体診察で確認する内容について説明できる。
・生命徴候（バイタルサイン）を正しく評価し、その意義を説明できる。
・神経系の診察法と神経症状の意味を説明できる。
・運動機能の診察法と運動機能障害の意義を説明できる。
・臨床検査法の内容を理解し、検査値の意味を説明できる。

■ 授業方法・教材

・教員作成の講義資料を配付する。

■ 評価基準

・中間試験（40%）、期末試験（60%）で評価する。

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			診察の概要
2			診察の方法（医療面接）
3			生命徴候の診察（脈拍）
4			生命徴候の診察（血圧）
5			生命徴候の診察（体温）
6			生命徴候の診察（呼吸）
7			生命徴候の診察（意識）

8			全身の診察（顔貌・顔色、歩行、姿勢と体位）
9			全身の診察（顔貌・顔色、歩行、姿勢と体位）
10			全身の診察（顔貌・顔色、歩行、姿勢と体位）
11			全身の診察（身体計測、体型・体格、栄養状態）
12			全身の診察（身体計測、体型・体格、栄養状態）
13			全身の診察（身体計測、体型・体格、栄養状態）
14			全身の診察（皮膚・粘膜・皮下組織）
15			全身の診察（皮膚・粘膜・皮下組織）
16			全身の診察（リンパ節、精神状態、言語）
17			全身の診察（リンパ節、精神状態、言語）
18			局所の診察（頭部、顔面、眼）
19			局所の診察（頭部、顔面、眼）
20			局所の診察（頭部、顔面、眼）
21			局所の診察（鼻、耳、口腔、頚部）
22			局所の診察（鼻、耳、口腔、頚部）
23			局所の診察（鼻、耳、口腔、頚部）
24			局所の診察（鼻、耳、口腔、頚部）
25			局所の診察（鼻、耳、口腔、頚部）
26			局所の診察（胸部、乳房、肺・胸膜）
27			局所の診察（打診・心音・呼吸音）
28			局所の診察（打診・心音・呼吸音）
29			局所の診察（打診・心音・呼吸音）
30			局所の診察（腹部）
31			局所の診察（腹部）
32			局所の診察（四肢）
33			局所の診察（四肢）
34			局所の診察（四肢）
35			神経系の診察（感覚検査法）
36			神経系の診察（感覚検査法）
37			神経系の診察（感覚検査法）
38			神経系の診察（反射検査）
39			神経系の診察（反射検査）
40			神経系の診察（反射検査）
41			神経系の診察（髄膜刺激症状、高次脳機能検査）
42			運動機能検査（運動麻痺）
43			運動機能検査（筋肉の異常）
44			運動機能検査（不随意運動）
45			運動機能検査（協調運動、起立と歩行）

専門基礎分野

部	昼間部 夜間部	科目名	臨床医学各論		担当教員	塩崎　郁哉		
開講時期	2 年次通年		総時限数	60 時限	授業形態	講義	単位数	8 単位

■ 科目内容

今日において様々な疾患があり、鍼灸治療に訪れる方々の病態や疾患も多岐にわたる。鍼灸治療の適応疾患は数多くある一方で、全てが適応というわけではなく、各種医療機関と連携をとりながら治療を進めていく必要がある。また、鍼灸師もチーム医療の担い手としてのニーズも高まってきており、他の医療従事者との共通認識、共通言語を持つことが求められる。

本講では現代医学の観点から各領域の代表的な疾患の概要を学ぶ。他の専門基礎分野科目の知識と関連づけながら、国家試験の対策のみならず、臨床に活かせる疾患の見方、考え方を身につけていく。

■ 到達目標

・各領域の代表的な疾患について、その概念、疫学、病態、症状、所見、治療、経過や予後を説明できるようにする

・現代医学の考え方を学び、鍼灸臨床のみならず、鍼灸師という医療人として他の医療関係者と対等に活躍できる力を身につける

■ 授業方法・教材

・教員が作成した資料、プリントを中心に授業を進める

・「病気がみえる」各巻（医療情報科学研究所編、メディックメディア）：教室にあり

■ 学習方法

・教科書と教員が配布した資料をもとにして授業を進めていく

・解剖学や生理学の知識が本科目を理解するうえで必要になるため、予習・復習では解剖学や生理学の教科書と共に勉強することで、相互の理解がより深まる

・日常生活にアンテナを張り、ニュース等で出てくる病気や疾患について興味を持ち、その都度調べてみることで理解が深まる

■ 成績評価

・中間試験(50%)、期末試験(50%)

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			運動器疾患
2			運動器疾患
3			運動器疾患
4			運動器疾患
5			運動器疾患
6			運動器疾患
7			運動器疾患
8			運動器疾患
9			運動器疾患
10			運動器疾患
11			神経疾患
12			神経疾患
13			神経疾患
14			神経疾患
15			神経疾患
16			神経疾患
17			神経疾患
18			神経疾患
19			神経疾患
20			神経疾患
21			消化器疾患
22			消化器疾患
23			消化器疾患
24			消化器疾患
25			消化器疾患
26			消化器疾患
27			消化器疾患
28			消化器疾患
29			消化器疾患
30			消化器疾患
31			肝・胆・膵疾患
32			肝・胆・膵疾患

33			肝・胆・膵疾患
34			肝・胆・膵疾患
35			肝・胆・膵疾患
36			肝・胆・膵疾患
37			循環器疾患
38			循環器疾患
39			循環器疾患
40			循環器疾患
41			循環器疾患
42			循環器疾患
43			循環器疾患
44			循環器疾患
45			循環器疾患
46			循環器疾患
47			腎・泌尿器・生殖器疾患
48			腎・泌尿器・生殖器疾患
49			腎・泌尿器・生殖器疾患
50			腎・泌尿器・生殖器疾患
51			腎・泌尿器・生殖器疾患
52			腎・泌尿器・生殖器疾患
53			呼吸器疾患
54			呼吸器疾患
55			呼吸器疾患
56			呼吸器疾患
57			呼吸器疾患
58			呼吸器疾患
59			呼吸器疾患
60			呼吸器疾患

専門分野

昼間部 夜間部	昼間部 夜間部	科目名	はり･きゅう理論		担当教員	二本松　明		
開講時期	2 年次通年		総時限数	30 時限	授業形態	講義	単位数	4 単位

■ 科目内容

患者さんに鍼や灸をするときに、①どこへ（圧痛点、硬結部位など）、②どのように（道具、刺激方法）を選択する必要がある。その際、それぞれの方法にどのような特徴があるかを知ることは効果的な治療を行うためにも重要である。また、鍼灸刺激が生体にどんな影響を及ぼすのか？、それはどのような仕組みによるものなのかを知っていなくてはならない。鍼灸理論は以上の内容を学習する教科である。

■ 到達目標

1. 治療法の決定に必要な治療法の特徴とそのメカニズムについて説明できる。
2. 鍼灸治療の際に用いる経絡・経穴の現代医学的解釈について説明できる。
3. 鍼灸治療効果に関わる基礎知識（神経・感覚生理学）について説明できる。
4. 鍼灸刺激による生体への影響（内臓機能の調節、鎮痛効果等）のメカニズムについて説明できる。

■ 授業方法･教材

・「はり・きゅう理論」:（社）東洋療法学校協会編、医歯薬出版株式会社
・教員が作成したプリント

■ 学習方法

・解剖学、生理学、はりきゅう実技の知識が必須となるため、復習しておくこと

■ 成績評価

・中間試験（50％）、期末試験(50％)で評価する。

担当教員　二本松　明
資　　格　はり師・きゅう師
所　　属　北海道鍼灸専門学校　附属臨床実習センター
経　　歴　新潟看護医療専門学校　東洋医療センター鍼灸治療院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			感覚（触圧覚）の受容と伝導
2			感覚（触圧覚）の受容と伝導
3			感覚（温度感覚）の受容と伝導
4			感覚（温度感覚）の受容と伝導
5			感覚（深部感覚）の受容と伝導
6			深部感覚と運動神経反射
7			感覚（痛覚）の受容と伝導
8			感覚（痛覚）の受容と伝導
9			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その①　局所性鎮痛
10			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その①　局所性鎮痛
11			鍼灸刺激による軸索反射
12			鍼灸刺激による軸索反射
13			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その②　脊髄レベルでの鎮痛機構
14			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その②　脊髄レベルでの鎮痛機構
15			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その③　鍼鎮痛のメカニズム
16			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その③　鍼鎮痛のメカニズム
17			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その③　鍼鎮痛のメカニズム
18			鍼刺激による鎮痛メカニズム　その④　広汎性侵害抑制性調節（DNIC）
19			鍼灸刺激による自律神経機能の調節（体性―自律神経反射）
20			鍼灸刺激による自律神経機能の調節（体性―自律神経反射）
21			鍼灸刺激による自律神経機能の調節（体性―自律神経反射）
22			関連学説　ストレス学説
23			生理学運動機能（筋機能）
22			生理学運動機能（筋機能）
23			生理学運動機能（筋機能）
24			生理学運動機能（筋機能）
25			運動神経系に対する鍼刺激の効果、神経疾患に対する鍼灸刺激の作用メカニズム
26			生理学内分泌系
27			生理学内分泌系
28			生理学内分泌系
29			性ホルモンと鍼灸刺激
30			まとめ

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	東洋医学臨床論		担当教員	川浪　勝弘、八重樫　稔		
開講時期	2 年次通年		総時限数	53 時限	授業形態	講義	単位数	7 単位

■ 科目内容
・鍼灸臨床にとって必要な主要症候に対して、治療の適・不適を判断する。
・疾患の特徴、治療方針、鍼灸治療の方法について学習し、東洋医学的視点と西洋医学的視点を総合した鍼灸治療を学習する。日常遭遇する頻度が高い症候・疾患の診察および鍼灸治療に必要な知識を修得する。国家試験に出題される可能性の高い疾患や症候について、基本的な事項を重点的に学習する。
・日常生活における漢方的知識の理解と応用を図る。漢方医学の全体の概念を把握する。

■ 到達目標
･臨床上遭遇しやすい疾患に対して、鑑別診断を行うことが出来る。
・疾患を把握し、疾患の特徴を説明することが出来る。
・国家試験に出題される疾患に対して、重要点を説明することが出来る。

■ 授業方法・教材
・教員が作成する資料

■ 学習方法
・各疾患の特徴を把握し、鑑別診断を行う。
・教員が配布した資料をもとに授業を進めていく。

■ 評価基準
・中間試験：50 点、期末試験：50 点

担当教員　　川浪　勝弘
資　　格　　はり師・きゅう師
所　　属　　北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター
経　　歴　　札幌センチュリー病院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			弁証の立て方
2			弁証の立て方
3			弁証の立て方
4			弁証の立て方
5			東洋医学的診断法
6			東洋医学的診断法
7			配穴法
8			配穴法
9			頭痛
10			頭痛
11			顔面痛
12			顔面痛
13			顔面神経麻痺
14			顔面神経麻痺
15			めまい
16			めまい
17			耳鳴り
18			耳鳴り
19			咳嗽
20			咳嗽
21			風邪
22			風邪
23			腹痛
24			腹痛
25			便秘と下痢
26			便秘と下痢
27			婦人科疾患
28			婦人科疾患
29			月経異常
30			月経異常
31			漢方医学
32			漢方医学
33			漢方医学
34			漢方医学
35			運動器疾患
36			運動器疾患
37			運動器疾患
38			運動器疾患

39			運動器疾患
40			運動器疾患
41			運動器疾患
42			運動器疾患
43			運動器疾患
44			運動器疾患
45			運動器疾患
46			運動器疾患
47			運動器疾患
48			運動器疾患
49			運動器疾患
50			運動器疾患
51			運動器疾患
52			十二経脈、奇経八脈
53			十二経脈、奇経八脈

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	経絡経穴概論		担当教員	志田　貴広		
開講時期	2 年次通年		総時限数	30 時限	授業形態	講義	単位数	4 単位

■ 科目内容

1 年次に引き続き、経絡経穴に関する知識（奇経八脈、奇穴、経絡経穴の現代的研究など）を学修する。また、経穴の取穴に必要な知識・技術の習得も行う。

■ 到達目標

1. 経絡経穴に関する知識を深め、資格取得に必要な知識レベルに到達する。
2. 経脈流注の関連を理解し、整合性のある取穴を手際よく正確に行うことができる。
3. 経穴の意義や役割、解剖学的な知識を理解し、体表部より触察することができる。

■ 授業方法・教材

教科書：「新版　経絡経穴概論　第 2 版」

1. 教科書や教員が作成した資料を用い、座学と取穴などの実技を並行して行う。

■ 学習方法

取穴の実技では実際の鍼灸臨床を意識し、患者の個人差を想定した取穴や身体の部位別の取穴を学ぶ。そのため、自発的になるべく多くの人の身体で取穴を行い、経験を積むようにすること。また、取穴の際に経穴の部位や解剖学の知識が必要になるため、授業前に 1 年次の復習を行っておくことが望ましい。

■ 評価基準

小テスト、期末試験により評価する。

担当職員　志田　貴広
資　　格　はり師・きゅう師
所　　属　北海道鍼灸専門学校　附属臨床実習センター
経　　歴　みらい鍼灸院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			オリエンテーション、第２章　経脈・経穴　奇経八脈
2			第２章　経脈・経穴　奇経八脈
3			第２章　経脈・経穴　奇経八脈
4			第２章　経脈・経穴　奇経八脈
5			第２章　経脈・経穴　奇穴
6			第２章　経脈・経穴　奇穴
7			第２章　経脈・経穴　奇穴
8			第２章　経脈・経穴　奇穴
9			第３章 経絡・経穴の現代的研究
10			第３章 経絡・経穴の現代的研究
11			経絡経穴を用いた治療法
12			経絡経穴を用いた治療法
13			経絡経穴を用いた治療法
14			経絡経穴を用いた治療法
15			経絡経穴を用いた治療法
16			経穴の取穴と解剖部位
17			経穴の取穴と解剖部位
18			経穴の取穴と解剖部位
19			経穴の取穴と解剖部位
20			経穴の取穴と解剖部位
21			経穴の取穴と解剖部位
22			経穴の取穴と解剖部位
23			経穴の取穴と解剖部位
24			経穴の取穴と解剖部位
25			経穴の取穴と解剖部位
26			経穴の取穴と解剖部位
27			経穴の取穴と解剖部位
28			経穴の取穴と解剖部位
29			経穴の取穴と解剖部位
30			経穴の取穴と解剖部位

専門分野

昼間部 夜間部	昼間部 夜間部	科目名	生体観察		担当教員	川浪　勝弘		
開講時期	2 年次通年		総時限数	30 時限	授業形態	講義	単位数	4 単位

■ 科目内容

2 年次科目である「東洋医学臨床論」の教科内容をもとに、基本的身体診察の実技を学習する。

運動器疾患についての基礎疾患を習得し、障害のメカニズムについて解剖学的に考察する。

■ 到達目標

1. 全身及び局所の診察方法の意義と方法を理解し、実際に行うことができる。
2. 疾患ごとの病態について理解・説明ができる・
3. 体表解剖を行うことができる。
4. 整形外科的理学検査の意義を理解し、適切に行うことができる。

■ 授業方法・教材

・教員が作成する資料

※本科目は実技科目であるが、教室を使用した座学を中心とする授業も行う。

■ 学習方法

本科目は「解剖学」、「経絡経穴概論」、「東洋医学臨床論」、の内容を踏まえ、座学と触診実技を並行して行う。

■持ち物

バスタオルや手ぬぐい等、ハーフパンツ、蛍光ペン

配布されたテキスト

■ 成績評価

・実技試験と期末試験

担当教員　川浪　勝弘

資　　格　はり師・きゅう師

所　　属　北海道鍼灸専門学校　附属臨床実習センター

経　　歴　札幌センチュリー病院

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1、2			胸郭出口症候群
3、4			胸郭出口症候群
5、6			胸郭出口症候群
7、8			肩関節
9・10			肩関節
11・12			肩関節
13・14			肩関節
15・16			総　括
17・18			評　価
19・20			膝関節
21・22			膝関節
23・24			足関節
25・26			足関節
27・28			総　括
29・30			評　価

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	臨床実習		担当教員	阿部　吉則、煤賀　有美		
開講時期	2 年次通年		総時限数	46 時限	授業形態	実技	単位数	2 単位

■ 科目内容

実際の鍼灸臨床の現場において、これまで学んできた座学および実技の知識・技術を確認し、2 年次と 3 年次にわたって鍼灸師として必要とされる臨床能力を総合的に育成する。

2 年次は、臨床実習前教育として主にコミュニケーション技法や医療面接を学び、鍼灸の基礎を復習する。また、北海道鍼灸専門学校付属臨床センターにて見学実習に参加する。

3 年次は、学校の付属臨床実習センターにおける外来診療に参加し、臨床実習指導者の指導・監視の下、時間内に鍼灸施術ができることを目的とする。

■ 到達目標

1. 医療従事者として適切な服装や身だしなみ、挨拶ができる。
2. 患者に不快感を与えない言葉遣いや、行動ができる。
3. 医療面接を行うことができる。
4. 診療録（カルテ）を書くことができる。
5. 基本的な鍼灸施術を行うことができる。

■ 授業方法・教材

特定の教科書はないため、講義ごと PC スライド、動画などを利用して学習する。

■ 学習方法

本科目は 2 年次に学習する「臨床医学総論」、「臨床医学各論」、「東洋医学臨床論」「人体機能学」「生体観察」の内容を踏まえ、その実技を行う科目です。常に各科目との関連を振り返るよう学習を進めてください。

■ 評価基準

毎週の課題、GW、夏休み、冬休みの課題の提出。

出席率 80％以上。

実技試験、レポート提出等の状況を踏まえて総合的に評価する。

■ 連絡事項

後期に行う実技試験が不合格の場合、春休みを利用して補講を行い、適宜追試験を行う。

担当教員　　阿部　吉則
資　　格　　はり師・きゅう師　あん摩マッサージ指圧師
所　　属　　北海道鍼灸専門学校　附属臨床実習センター
経　　歴　　ユリ治療室

担当教員　　煤賀　有美
資　　格　　はり師・きゅう師、看護師
所　　属　　北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター
経　　歴　　SSC ビューティークリニック

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1・2			オリエンテーション
3・4			見学実習
5・6			見学実習
7・8			見学実習
9・10			見学実習
11・12			見学実習
13・14			見学実習
15・16			医療面接の概要
17・18			医療面接の概要
19・20			医療面接の概要
21・22			医療面接の概要
23・24			下腿の刺鍼・施灸
25・26			下腿の刺鍼・施灸
27・28			下腿の刺鍼・施灸
29・30			下腿の刺鍼・施灸
31・32			背部の刺鍼・施灸
33・34			背部の刺鍼・施灸
35・36			背部の刺鍼・施灸
37・38			背部の刺鍼・施灸
39・40			背部の刺鍼・施灸
41・42			背部の刺鍼・施灸
43・44			実技試験
45・46			実技試験

※オリエンテーションは見学実習前に行う。

専門分野

部	昼間部 夜間部	科目名	はり・きゅう実技		担当教員	川浪 勝弘、煤賀　有美		
開講時期	2 年次通年		総時限数	75 時限	授業形態	実技	単位数	5 単位

■ 科目内容
・日常疾患で遭遇しやすい運動器疾患の診察方法・治療方針について、現代医学的なアプローチと東洋医学的アプローチについて系統的に疾患別に学習する。
・産婦人科領域、小児はり、美容鍼について治療技術を修得する。

■ 到達目標
・疾患別に診察・治療方針を立て、治療することが出来る。
・身体各部の刺激方法および経穴に対して、正しく刺鍼法を修得することが出来る。
・施灸用具とその取扱い、種々の灸療法、治療点に対して正しく施灸することが出来る。

■ 授業方法・教材
・教員が作成する資料

■ 学習方法
・教員がデモンストレーションを行い、その後にペアに分かれて刺鍼・施灸を行う。

■ 評価基準
・実技試験:60 点以上(前期期末実技試験、後期期末実技試験)
・出 席 率:80%以上

担当教員　　川浪　勝弘
資　　格　　はり師・きゅう師
所　　属　　北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター
経　　歴　　札幌センチュリー病院

担当職員　　煤賀　有美
資　　格　　はり師・きゅう師、看護師
所　　属　　北海道鍼灸専門学校 附属臨床実習センター
経　　歴　　SSC ビューティークリニック

■ 授業計画

回	月/日	出欠	項　　目
1			基本的な刺鍼手技・施灸手技
2			基本的な刺鍼手技・施灸手技
3			基本的な刺鍼手技・施灸手技
4			基本的な刺鍼手技・施灸手技
5			肩こり
6			肩こり
7			肩こり
8			肩こり
9			肩こり
10			肩こり
11			東洋医学的にみた上肢の見かた
12			東洋医学的にみた上肢の見かた
13			東洋医学的にみた上肢の見かた
14			東洋医学的にみた上肢の見かた
15			腰背部
16			腰背部
17			腰背部
18			腰背部
19			腰背部
20			東洋医学的にみた腰背部の見かた
21			東洋医学的にみた腰背部の見かた
22			東洋医学的にみた腰背部の見かた
23			東洋医学的にみた腰背部の見かた
24			下肢神経痛
25			下肢神経痛
26			下肢神経痛
27			下肢神経痛
28			東洋医学的にみた下肢の見かた
29			東洋医学的にみた下肢の見かた
30			東洋医学的にみた下肢の見かた
31			東洋医学的にみた下肢の見かた
32			応用実技
33			応用実技
34			応用実技
35			応用実技
36			応用実技
37			応用実技
38			応用実技

39			特殊鍼法
40			特殊鍼法
41			特殊鍼法
42			特殊鍼法
43			特殊鍼法
44			特殊鍼法
45			特殊鍼法
46			冷え・むくみ
47			冷え・むくみ
48			月経不順
49			月経不順
50			月経不順
51			月経不順
52			不　妊
53			不　妊
54			不　妊
55			不　妊
56			妊娠中
57			妊娠中
58			産　後
59			産　後
60			更年期
61			更年期
62			更年期
63			更年期
64			ダイエット
65			ダイエット
66			ダイエット
67			ダイエット
68			美容鍼
69			美容鍼
70			美容鍼
71			美容鍼
72			小児はり
73			小児はり
74			お灸
75			お灸